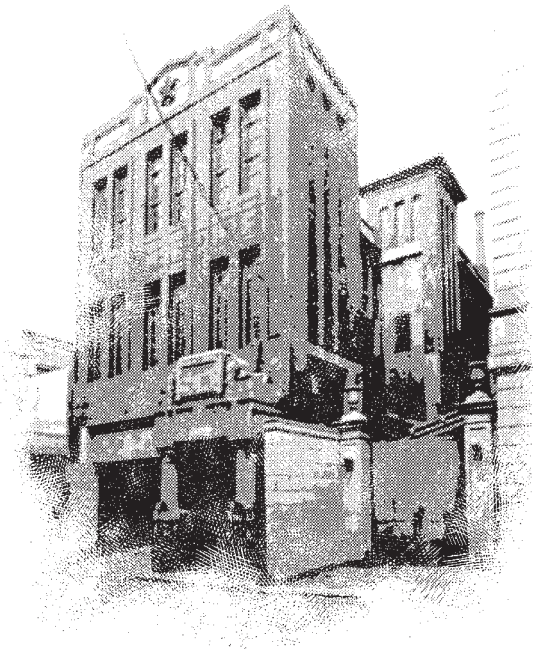
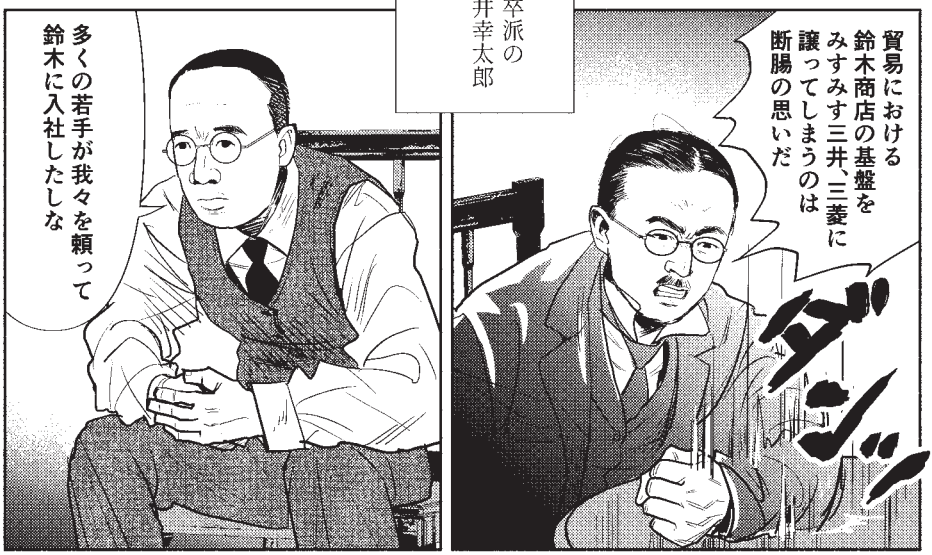
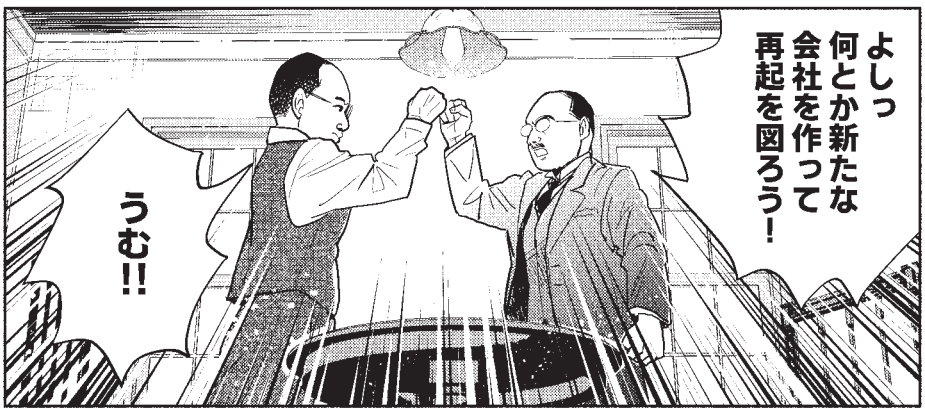
第6章　日商設立、それぞれの道

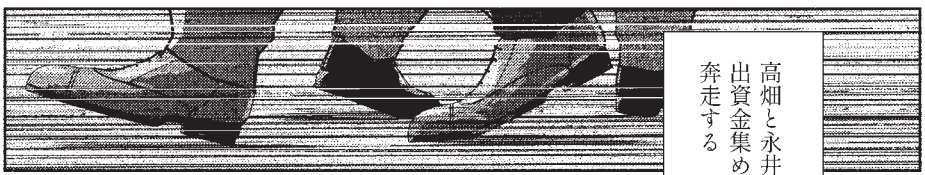


鈴木商店は倒れたがその人材には産業界での再起を図る者もあった

その代表が学卒派の高畑誠一と永井幸太郎であった

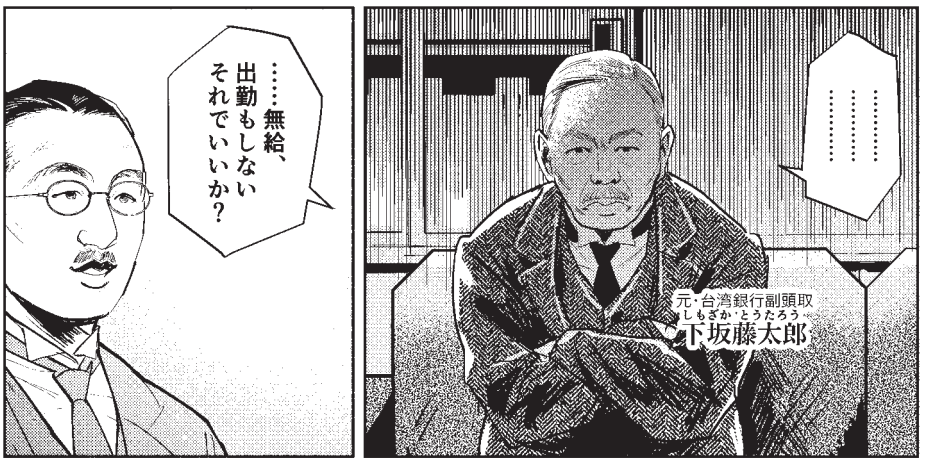






高畑と永井は出資金集めに奔走する

※ 各務謙吉は損害保険業界の父。東京海上火災保険の社長、会長を歴任。



そして
鈴木商店の残党も含め
三九名が出資者に加わり
昭和三(一九二八)年
二月八日
日商を設立

高畑、永井のほか、
TATAの銑鉄取引の
責任者の多賀二夫、
鉄材部の責任者であった
楓英吉、
若手では落合豊一、
西川(須原)政一、
天下三分の宣誓書を
ロンドンに届けた
小川実三郎の顔もあった

しかし
台湾銀行をはじめと
した銀行団は決して
鈴木家と金子直吉が
日商に加わることは
許さなかった

日商の創立総会が行われた
江商ビル

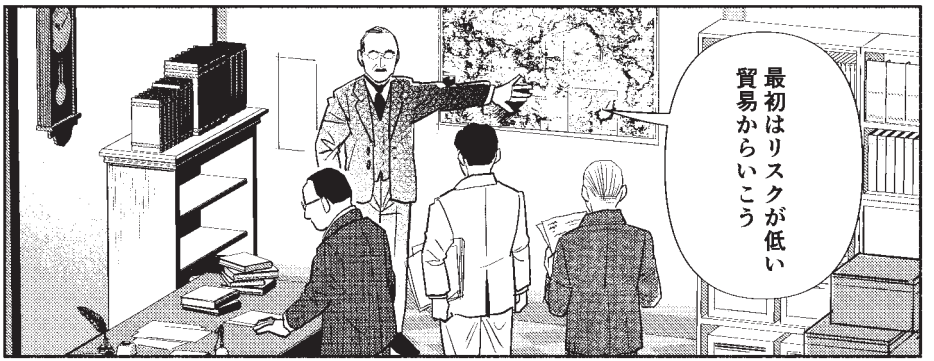
鈴木商店破綻の教訓を
生かさなければならない

「スモール・スロウ・バット・ステディ
(ちっぽけで、歩みも遅くても
仕方がない。堅実に行こう)」

これを
新会社のモットー
とする!

※ 金子直吉のこと。

パチ
パチ
パチ…
けっ
金も失い
本業を捨てて
いったい何を
やろうというのか
三年ももてば
上出来だ

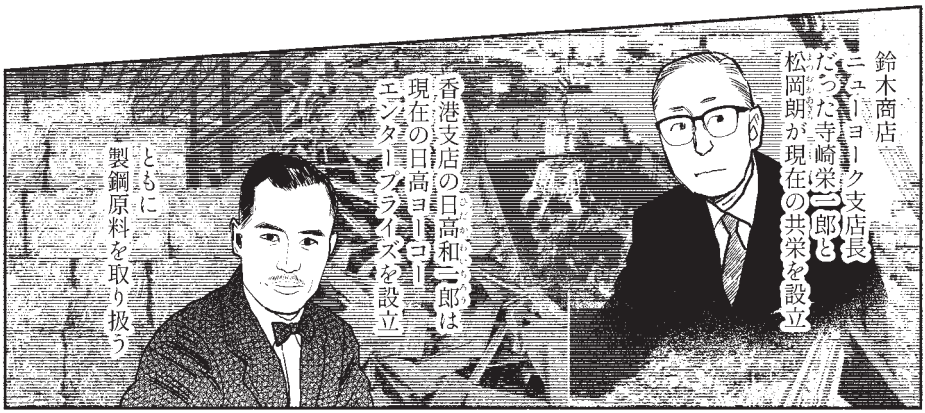

最初はリスクが低い
貿易からいこう

TATAは
銑鉄の取引を日商に
引き継いでくれます
大戦後の市況暴落時に
鈴木が損失を被りながら
取引してくれたことに
未だに恩義を感じて
くれています
私は
アメリカ西海岸から
原油の輸入を試みます

うむ
……よし
旧鈴木系の
製造事業会社との
関係も強化しよう

鈴木商店破綻後
優良な
帝人、神戸製鋼所、
帝国麦酒
（現・サッポロビール）
などは鈴木商店時代の
債務を背負いながら
事業を継続
ただし一部の事業は
三井、三菱などに
譲渡された

なかには
これを機に独立
するものもいた

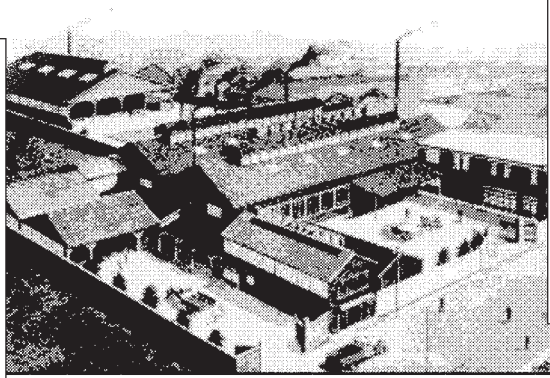


ある日
鈴木商店鉄材部の親睦会があり
楓英吉(日商)、
坂本寿(日亜製鋼)、井上清
(井上商店、神戸製鋼所の問屋)
の三人が集まった

東京方面から
バネ鋼の圧延の
注文が伸びている
自動車用のバネに
使うらしい

これから自動車が
どんどん普及して
いくからな

こうして昭和一四(一九三九)年
芝浦スプリング製作所を買収し
日商のグループ会社として
日本発条を設立した



初代社長は楓英吉が務めた
日商はようやく貿易だけでなく
かつての鈴木商店のように
製造事業にも
進出を果たしたのだった

一方の金子直吉は天然ソーダ輸入販売会社として設立された太陽曹達（後・太陽産業　現・太陽鉱工）にて鈴木家とともに再起を図ることになる
このままでは主家である鈴木家に申し訳がたたん新たな事業も手がけたい
祥龍寺
同寺は鈴木商店破綻寸前に積み立ててあった鈴木よねの退職金を寄進することで再建された
鈴木商店は破綻してしまったが主人の岩治郎が亡くなった際に廃業する予定が直どんがここまで連れてきてくれた感謝の気持ちしかない
昭和六（一九三一）年太陽曹達の代表取締役には高畑誠一が就任、金子直吉は相談役となった
鈴木家と太陽曹達は旧鈴木の関連会社の株式を順次買い戻し日商、神戸製鋼所の筆頭株主となる
昭和九（一九三四）年には田宮嘉右衛門が神戸製鋼所の社長に就任
かつての顔ぶれが並ぶ機会も増えた

晩年に至っても
金子直吉の事業意欲は
衰えることがなかった

高畑ぁ〜……
金が欲しい
ワシはもっと
事業をやりたい
いんじゃ

有馬温泉　兆楽

サラワクで
発電事業や
マレー半島で
ボーキサイト
西オーストラリアで
鉄鉱石の開発……
よーく調べられて
いますね
金子さんは……

今やられている
製鋼用の
モリブデンも
好調だとか

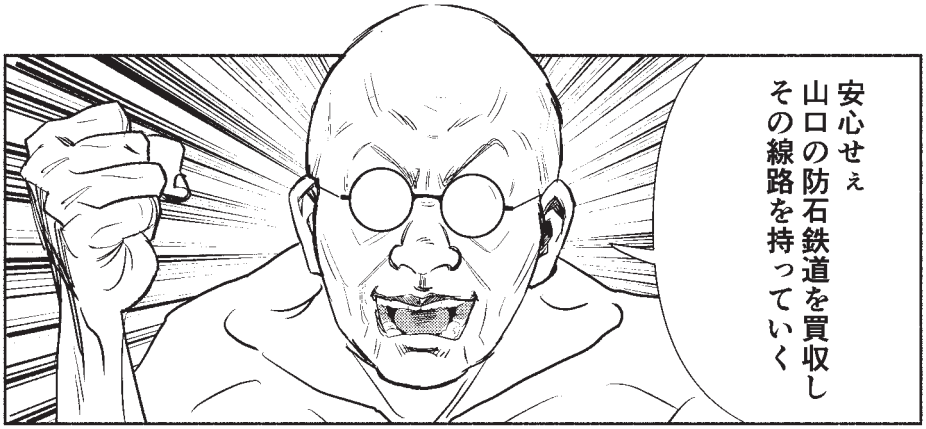
本当の狙いは
何だと思う？
分かるか田宮？
石炭液化事業だ!!

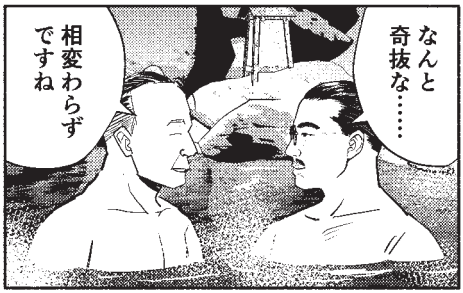
これから
航空機の時代になり
自動車の普及のためにも
液体燃料が必要だ
日本には石炭がある
モリブデンが液化の触媒
として必要なんだ

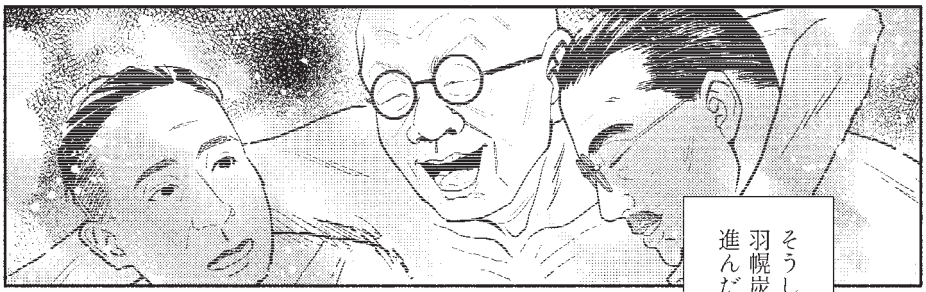
鈴木は
山口や筑豊で
石炭事業をやって
いましたね

うむ！　今
鈴木時代に取得した
北海道羽幌炭砿の
鉱区を買い戻し
辻湊ら
旧鈴木の技術者を
集めておる

石炭輸送のために
鉄道を敷く
必要がありますが
今は鉄不足ですよ





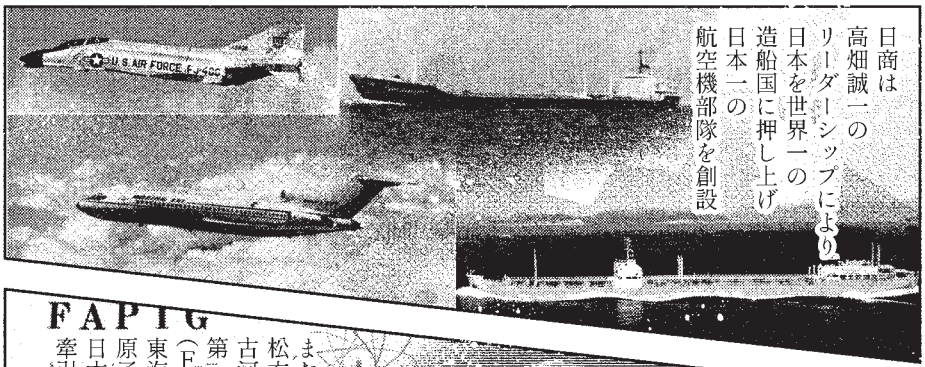


金子直吉は
新時代の到来を目前に
その生涯を閉じた

ときに
昭和一九(一九四四)年
七七年の
波乱の生涯であった
羽幌炭砿は戦後
年間一〇〇万トンを出炭し
高度経済成長に必要な
エネルギー源を供給した
金子直吉の死の翌年
第二次世界大戦が終結

そして

新たな世界秩序のなかで各社は羽ばたいてゆく



日商は高畑誠一のリーダーシップにより日本を世界一の造船国に押し上げ日本一の航空機部隊を創設

また旧鈴木系と松方の川崎系、古河系を結集して第一原子力産業グループ（FAPIG）を設立東海村に日本初の原子力発電所を導入日本の高度経済成長を牽引した

昭和二八（一九五三）年長岡禅塾開塾
一五周年記念の催しが開かれ岩井系企業間の相互の連携・親睦をはかるため岩井勝次郎の戒名「最勝院大徹無居士」にちなむ「最勝会」が発足した

現在の最勝会メンバーは
関西ペイント（株）
（株）ダイセル
（株）トーア紡コーポレーション
（株）トクヤマ
日本橋梁（株）
日本発条（株）
富士フイルム（株）
双日（株）

最勝会は月に一度双日本社にて定例会が開かれ令和五年には四六三回を超えいまも続いている

昭和四三(一九六八)年
日商と岩井は合併し
日商岩井が発足

岩井産業社長
岩井英夫

日商社長
西川政一

戦後の日本綿花は
紡績だけでなく
商品の多角化を進め
総合商社化を
果たしていく

創立九〇周年にあたる
昭和五七(一九八二)年
社名を日綿實業から
ニチメンに変更

Nichimen

そして
平成一五(二〇〇三)年
ニチメンと日商岩井は
経営統合し
ニチメン・日商岩井
ホールディングスを設立

翌年の
平成一六(二〇〇四)年
双日として発足する

双日の誕生である

日本は開国をきっかけに
産業革命が始まった
「産業を興して日本を
一流国の仲間入りさせる」
という使命感は
日本そのものを動かす
原動力となった。

第一次大戦期、
鈴木商店は年商で日本一に、
岩井商店も製造業を次々と興し、
日本綿花は日本最大産業の
紡績業に原料、製品販売で
大きく貢献した。
鈴木商店、岩井商店、日本綿花の
3社を合わせた事業規模は、
財閥を凌駕し、
日本の産業界に
大きな存在感を示した。

第二次大戦後も、
戦後復興、高度経済成長、
オイルショックを経て、
日本は
JAPAN AS NO.1と
称される程、
世界の経済大国に
上りつめた。

双日の前身は、
それぞれの時代において、
重要な役割を背負い受け継いだ
有形無形の資産を変革させ、
未来を創造してきた。

そのDNAは
現在の双日にも
受け継がれている。
事業と人材を創造し続ける
総合商社、
それが双日である。

そして
双日の源流となった
三社で活躍した先人の魂は
現在の双日にも受け継がれ

総合商社 双日　未来を創造した先駆者たち（完）